平成26年度　十文字学園女子大学学術図書出版助成　書評

金勝雅裕智　編曲集
～日本の調べ　No.3～

金勝裕子（著）（2015年２月，大日本家庭音楽会）

公益財団法人正派邦楽会　大師範　井上雅楽美恵

箏曲の歴史には、これまでの奏法を含めてお互いの領域を踏み込まないで演奏を守ってきた経緯がある。しかし現代に於いて音楽はたいへん自由に変化していくものとしてとらえられ、洋楽からの取入れや世界の民謡を含めて箏や尺八で演奏することも、もはやめずらしいことではないあらゆるジャンルの展開がなされている。たとえばビバルディの「四季」や南米の民謡なども箏曲に編曲されている。

従来お箏という楽器は江戸期から裕福な庶民の婦女子の間でたしなまれてきたいわゆる遊び事であった。教える指導者側は職屋敷と呼ばれる当道の団体から派遣されている師匠で盲目の人がお金を得ることができるよう職業化されてきたものが、一般的な習い事としての在り方であった。

現代では年齢を問わずわかりやすい楽譜や手習いから、箏に興味があるということで習えるものである。そうはいっても困難な箏曲を弾けるようになれば、それ相応の知識やテクニックが必要とされる難しい楽器と言えるものでもある。

そういった意味では金勝氏のこの第三集目の曲目は第二集目に引き続き日本の民謡を取り上げているところが箏曲としてはジャンルを超えてなされている編曲と言えるのである。

第１曲目「花笠踊り」は山形県の代表民謡であり、掛け声も楽しくにぎやかな民謡と言えるものである。民謡としては比較的一節が短く、５番まである中、歌にはこぶしがきき民謡の醍醐味のようなものが味わえると言える。編曲としてこのくらいの長さがあれば「花笠踊り」の踊り手を交えながら舞台も華やぐことができる。テクニック的にも難解ではなくたいへん親しみやすく仕上げている。

第２曲目、鹿児島「小原節（おはらぶし）」陽旋法に入るが、ゆったりとどこか寂しさが漂う歌である。この民謡も一節がたいへん短く６番まで歌われている。この歌の編曲で氏は３番と４番の間に間奏部を入れ、本来の「小原節」の主旋律に同じ九州の「炭坑節」の複旋律を取り込み、主旋律を聞きながら「おや？何の歌だったかしら」と聞き手が耳をそばだてるような編曲を試みているところがたいへん面白い編曲と言える。

演奏会にあたり、民謡と共に民舞を試み視聴覚で聴衆に楽しんでもらえるたいへん楽しい題材となった。

より多くの人に演奏を聴いてほしい、演奏を楽しんでほしいというのが原点にあり、まさに「音楽は大衆のものである」という金勝氏の考え方の原点ともいえる作品に仕上がっていると確信する。